

今日の福音書の書き出しには、「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。」とあります。これは、イエス様に先立って活動していた、ヨハネの逮捕という出来事が、イエス様に危険なものを感じさせて、逃げるような印象を与えます。しかし、事実はそうではありません。ヨハネを逮捕したのは、ヘロデ・アンティパスという領主ですが、イエス様が向かわれるガリラヤは、そのヘロデ・アンティパスの支配する領土そのものだったからです。

今日の福音書の前は、4章1～11節「誘惑を受ける」という、お話です。石をパンに変えたり、エルサレムの神殿から飛び降りたり、高い山の上から、この世の繁栄を見たり、など、これは、イスラエルの都があるユダヤ地方の出来事だと思われまます。エルサレムの都は、東にあるオリブ山を越えると、すぐに砂漠が広がるので、そのあたりでイエス様は悪魔の誘惑を受けられたのでしょう。そんなイスラエルの中心から離れて、イエス様は北のガリラヤ地方、ガリラヤ湖畔の町、カファルナウムに住むことを決意されたのです。

それでは、イエス様が住まれることになったガリラヤとは、どんな所でしょうか。

一般に私たちが頭に浮かべるのは、エルサレムは大都会で、ガリラヤは田舎。だから、エルサレムは文化の中心で、ガリラヤは、文化の遅れた、文明の進歩から取り残された所、という印象があるかもしれません。

しかし、事実は全く逆なのです。エルサレムは、砂漠に囲まれ、ユダヤの伝統を守り、他の宗教文化を排除している所です。一方ガリラヤは、イスラエルで一番土地の肥えた所です。また、エジプトやシリア、ローマなどに通じる道があり、商人がいろんな文化を持ち込んでくるのです。そんな豊かなところですから、しばしば外国から攻められていました。

イエス様が生まれる700年くらい前、イスラエルの国は、南北に分かれて二つの国でしたが、北に属するこのガリラヤ地方は、東の国アッシリアによって滅ぼされてしまいました。そして、外国人が多く住むようになったのです。北の国の滅亡を見ていた預言者が、イザヤです。イザヤは南のヒゼキヤ王に仕えていました。そのイザヤが、滅亡した北のガリラヤ地方に、やがてダビデ王の位を継ぐ者が現れる、と預言したのです。

福音書は少し手が加えられているので、旧約を読みます。イザヤ書8章23節の途中から

「先に、ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが、後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」となります。

そして、その後、3節ほど飛ばすと、5節目で

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。」と続くのです。

外国人に踏みにじられたガリラヤですが、イエス様の時代になると、この、北のガリラヤはまたイスラエルの領土に入れられましたので、南のユダヤ地方から移住する人たちが現れて、大工のヨセフも移り住んだのではないか、と思われます。

ですから、マタイによる福音書を書いたマタイは、このイザヤ書を引用することによって、ダビデの王位を継ぐ救い主・メシアは、この外国の文化が入り混じりあい、混沌の中にあるガリラヤに現れたんだ、と言いたいのだろうと思います。

それでは、そのガリラヤに移り住んだイエス様自身は、どんな気持ちで、ここに移られたのでしょうか。

12節では「ガリラヤに退かれた。」となっていますが、13節では、「そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。」となっています。

ナザレはイエス様が育って、大工の仕事をしていた、故郷です。ガリラヤ湖から西へ30キロほど行ったところにある、小高い丘の上にある町です。やはりガリラヤ地方なんです、それまでの住み慣れた所を後にして、丘の上から、海面下200メートルという低いところにある、ガリラヤ湖畔に移られたことを表します。ゼブルンとかナフタリという言葉は、本来は創世記で、エジプトに移り住んだ、ヤコブの息子たちの名前です。それがエジプトを脱出する頃には、それぞれ12人の息子の子孫が部族を形成するようになります。そして、モーセの後を継いだヨシヤに率いられて、約束の地に部族ごとに移り住みました。

聖書の後ろの方に、「3. カナンへの定住」という地図があつて、ゼブルンは、イエス様の育ったナザレとか、そこから近いカナなどを含む地域。そして、ナフタリには、ガリラヤ湖の周りが入っていて、カファルナウムも、ナフタリの一部です。

16節に、イザヤの言葉が引用されていますが、

「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」と言っています。

イエス様が、自分のそれまでの、日のあたる丘の上の生活を後にして、「世の光」として、ナフタリの「死の陰の地」ガリラヤ湖周辺という、低い土地に十分な光をもたらすために、働き始められた、ということではないでしょうか。

それは、具体的には、最後の23節

「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。」ということになるでしょう。

異邦人のガリラヤという言葉が、イザヤの預言の中に出てきました。中央のエルサレムの正統ユダヤ人たちからすると、異教の文化に取り巻かれているガリラヤなんかに住む人々は、救いからはずっと遠い存在を思われていました。しかし、イエス様は、神様から離れた、罪の象徴のように思われていた病人たちや患いを取り除く神の小羊として、その働きを始められた。そして、その活動に協力する弟子たちを4人、呼び出されたのです。イエス様が、ご自身ナザレの大工の仕事を後にして、新しい生活に入られたように、湖で魚を獲っていた漁師たちを、「人間をとる漁師」という、新しい生活に導いているのです。これから、イエス様たちが、どんな活動することになるか、マタイによる福音書に沿って、学んでゆくことにしましょう。